みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

An Ethnographic Account of Mysticism in a Central Javanese Village

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関本, 照夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004369

ジャワ神秘主義の民族誌

関　本　照　夫*

An Ethnographic Account of Mysticism in a Central Javanese Village

Teruo SEKIMOTO

This paper, based on my field research in a village in the Surakarta region of Central Java, presents an ethnographic account of mystical beliefs and practices of individual villagers. For most Javanese, mysticism represents one of the most powerful undercurrents in their culture. The Javanese call their mysticism *kebatinan*(the inner).

There are thousands of mystical sects throughout Java, some of which have large, well-established organizations. But these organized mystical sects are just one aspect of the *kebatinan*. Although only a small minority of the population actually join in the mystical sects, a vast majority of people, who do not commit themselves to any of them, also accept the *kebatinan* in some form or another. Some people even think that to accept the *kebatinan* is almost synonymous with being a Javanese.

It is difficult to provide a general outline of the *kebatinan*. It is not a unitary system of beliefs and practices shared by a homogeneous group of people, but a loosely defined class of magico-mystical ideas and activities, from which each Javanese selects some aspects and organizes his/her own view of the *kebatinan*. What one man thinks and practices as the *kebatinan* may be different from that of his neighbor. Thus, before presenting any general account of the *kebatinan* a number of individual cases must be collected and variations among them be examined. So far we have several theological, historical, and anthropological studies on the Javanese *kebatinan*, but they are almost exclusively concerned with the well defined ideas and teachings of some large sects. Everyday aspects of the *kebatinan*, which are more diffusive and less unitary, remain untouched.

* 一橋大学，国立民族学博物館共同研究員

This paper is intended to fill this gap in the study of the *kebatinan* by depicting how it is conceived of and paracticed by different individuals, with village everyday life as their common background.

CONTENTS

1. Contemporary Javanese mysticism
2. Returning to the God through the control of human passion
3. Islam and the *kebatinan*
4. Ascetic efforts of concentration to attain spiritual intuitions
5. The control of human passion as an everyday ethic
6. Gaining magico-mystical power
7. Staying overnight at graveyards
8. Reading signs of the World

はじめに
1. 今日のジャワ神秘主義
2. 欲望の統御と神への道
3. イスラームとクバティナン
4. 精神の集中と霊感の追求
5. 人生の倫理
6. 力の獲得
7. 墓地に夜をすごす
8. 意味を告げるしるし
おわりに

はじめに

筆者は1980年8～9月に，国立民族学博物館特別研究「日本民族文化の源流の比較研究」（研究代表者佐々木高明教授）の一部をなす「日本基層文化とオーストロネシア系諸民族の文化との関連に関する研究」の海外調査を担当し，インドネシアの中部ジャワ州スラカルタ地方農村に滞在して，住民の民俗的信仰についての調査を行なった[1)]。そこでは，日本民俗宗教の中にも広く見いだされるような，肉体的修業を通じて力を獲得し，異次元の現実に接近せんとするさまざまな観念・行為が見いだされた。以下はその報告であり，日本の民衆的宗教の中に濃厚な神秘主義的流れを広く周辺諸地域との比較によって考察するため，重要な資料を含んでいると思われる。

1) 調査地は中部ジャワ州スコハルジョ県のD村である。なお筆者は同じ村での人類学的フィールドワークを，1975年5～12月，1978年8月～1979年4月の期間にも行なった。

1. 今日のジャワ神秘主義

中部ジャワに滞在していた1970年代後半，わたしは至るところでクバティナン *kebatinan* という言葉を聞いた。クバティナンとはジャワ的な神秘主義にジャワ人が与える名称であり，「内」を意味するアラビア語からの借用語バティン *batin* を語根としている。したがって意訳するなら「内面の道」といった意味である。この言葉でよばれる観念と行為の体系は一様なものではなく，さまざまな要素を含んでいる。外部の観察者はそこに，イスラーム神秘主義，ヒンドゥー神秘主義，ヨーロッパ近代の神智学，いわゆるアニミズム的な超自然的力や呪術への信仰など，さまざまなものを見いだすかもしれない。だがクバティナンを信ずるジャワ人にとって，それは一個の一貫した体系であり，外来の借りものではない，すぐれてジャワ的なものと考えられている。

1970年代初頭にジョグジャカルタの街に滞在したムルダーは「ほとんどすべてのジャワ人にとって，自分たちの文化のもっとも奥深い基礎を成しているのは神秘主義と呪的・神秘的実践である」とのべている [Mulder 1980: 1]。ジャワ人の生活が，学者が一般に神秘主義とよぶ現象に色濃く染まっているのは，最近に始まったことではない。だが，この神秘主義を多くのジャワ人が意識的に捉えかえし，ジャワ人のアイデンティティーの要として自己主張しはじめるのは，むしろ最近の事態である。意識化された神秘主義にはそれを指す言葉が必要である。クバティナンという言葉自体は，ジャワにイスラームが広まった16世紀にまで遡る古いものである。だが，この言葉が，まるでジャワ人の文化を代表するものであるかのように，至るところで，さまざまな社会層をつうじて語られるという事態は，およそ過去30年ほどの間にとりわけ顕著になったことである。

クバティナンというジャワ語の語根をなすバティンという語がアラビア語起源であることにしめされるように，クバティナンという概念自体は，ジャワがイスラーム化した16世紀以後成立したものであり，イスラーム神秘主義 *tasawwuf* の強い影響をうけている。インドネシアの正統主義的イスラーム教徒の中には，クバティナンをイスラーム信徒共同体内部の道をそれた誤った傾向として批判し敵視する見方も存在する[2)]。だがジャワの神秘主義は，イスラームの伝来とともに始まったものではなく，それ以前からの長い歴史をもっている。イスラーム伝来以前一千年近くにわたり，インド文明の影響下に王朝文化を発展させてきたジャワでは，すでに文明の主要な形ができあ

2) ムハマディア系のイスラーム指導者の中で，ラシディ，ハムカなどは，オランダ東インド会社や蘭印植民地政庁がイスラームの力を弱めるために反イスラーム的なクバティナンを助長したという見方をとっている [Rasjidi n.d.; Warsito *et al.* 1973; Hamka 1974]。

がっていた。イスラームは，これをまったく新たなものに置き換えたのではなく，むしろ以前からの土台の上に，新たな宗教形式を編成し直したのである。現代ジャワのクバティナン信奉者が，その思想を表現するためにたえず立ち帰るもっとも根本的な神話体系の一つに，インドの「マハーバーラタ」などの叙事詩をジャワ的に潤色した影絵芝居 *wayang kulit* の物語群があることに示されるように，ジャワ神秘主義はまずヒンドゥー的・仏教的枠組みのもとに発展した。さらに遡るなら，神霊化した死者への崇拝，特定の際だった人物，その死後の霊，あるいは特別の物や場所が有する並はずれた力についてのマナ的観念など，インド文明渡来以前の，インドネシア的，マラヨ・ポリネシア的観念にも，神秘主義の土着的基盤が求められるであろう。

このような背景を持つジャワ神秘主義は，16世紀以降，イスラーム神秘主義との相互作用によってさらに発展し，また今世紀に入って，神智学などのヨーロッパ近代の神秘思想や，深層心理学の独自な受容もおこなわれている。したがってそれは，各界のエリートや知識層のあいだに見いだされる形而上的思索の諸サークルから，一般大衆のあいだのより現世利益に重点のかかった信仰・実践にいたるまで，きわめて多様な現れかたをしめし，社会の全階層にわたる広がりをもつ。

クバティナンの興隆は，またきわめて現代的な現象でもある。遙かな古代からジャワ文化の基調をなしてきた神秘主義は，1945年の独立以降の社会の混乱と変動のなかで，国家と民族のアイデンティティーの基盤としてより強く自覚化され，多くの組織化されたクバティナン・サークルが生まれ発展した。その中には巨大な全国組織を持つパンゲストゥー Pangestu，スマラー Sumarah，世界的な組織を有するスブド Subud のように，教団と呼ぶにふさわしい規模と内実を持ったものも存在する。これらの「教団クバティナン」というべきものについては，ラフマット [Rahmat 1976]，ムルダー [Mulder 1980] などによる歴史的概観，ド・ヨン [De Jong 1976]，ハルン [Harun 1967] などによる教理思想の研究など，すでにいくつかの業績が存在する。

本稿は，組織化されたクバティナンの歴史や教理思想を全体的に概観する上述のような諸研究とは異なり，筆者が調査地の村で観察し経験した神秘主義の農村的実践形態を紹介する民族誌的研究である。クバティナンとは何かを概説的に語るのは非常に危うい企てである。それが社会の中の多数者と区別され強く団結した特定少数者の組織や運動ではなく，ジャワ人の多数がきわめて自明のこととして語り実践する文化的現象であるがゆえに，ジャワ人の間で共通の了解の得られた明確なクバティナン像は存在しない。これがクバティナンだと短い紙数の中で定義づけるには，現象はあまり

に多様で広範なものである。たとえばムルダーは，「ジャワの信念体系の核心には広い意味でのクバティナンの実践が存在する」[MULDER 1980: 25] という。だがクバティナンの内実も，またジャワ文化なるものも，固定した均質的な体系として存在するのではない。個々の社会的行為者は，ある広い枠の中から，これがクバティナンである，これがジャワ文化であると，自らにとって意味づけ可能なものを取り出し，それによって自己の意味の世界を築き上げる。以下に紹介するいくつかの事例はいずれもそうした個人的営みの姿を伝えるものであり，そのことによって，従来のクバティナン研究に欠落した民族誌的側面を埋めんとするものである。

2. 欲望の統御と神への道

最初に取り上げるムリョノは村では第一の知識人で，温厚な丸顔に笑みを絶やさず，いつも礼儀正しく，わたしにとってもっとも良き師の一人であった。かれの亡父はもともとソロの町の裕福な商人の一族に生まれたが，新天地を求めて，1930年代に息子のムリョノを連れて村に移り住み，市場の前で雑貨屋をはじめた。独立闘争期には，ゲリラ闘争の後方指導者をつとめ，その後長く村長の任にあった。ムリョノは若い頃共和国のゲリラ「学生軍 Tentera Pelajar」の一員として，スラゲン，プルウォダディ方面の前線で戦い，一時バンドン工科大学に学んだこともある。またイスラームの教義や戒律には関心の薄い村人の中で，数少ない熱心なイスラームの信徒でもある。

ムリョノによれば，クバティナンはジャワ的な神秘知・神秘術 *ilmu* の集成であり，中心には三つの知の体系がある。第一はサンカン・パラン *sangkan paran*（いずこより来たりいずこへ行くか）といい，生命の源と目的についての知である。第二はカヌラガン *kanurangan*（身を低く無にする），すなわち身体の統御の術である。第三は，カシダン・ジャティ *kasidan jati*（完全なる死），つまり死を迎え，死と対面することについての知識である。

さらにムリョノは語る。クバティナンの目的は，感覚的欲望ナプス *napsu* を統御して生命の源，すなわち神 *Tuhan* と合一することにあり，このナプスという概念こそがクバティナンの人間観の核をなしている。それによると，一人一人の人間は四人の霊的な兄弟に前後左右をとり囲まれている。それは，兄（姉）たる羊水 *kakang kawah*, 弟（妹）たる後産 *adi ari-ari*, 母の思いから出てくる恐れと希望とである。この四人の兄弟は四つのナプスである。第一はソフィア *sofia*，つまり物質欲，第二はアマラ

amarah，すなわち自尊心，第三はルアマ *luamah*，すなわち食欲，第四がムトマイナー *mutmainah*，つまり徳への欲望である。人が寝食を断つ行を実践し思考を集中していくと，四つのナプスのうち最初の三つの低級なナプスが働かなくなり，もっとも高級なムトマイナーのみが働きつづける。このムトマイナーが人をその生命の源たる神へ仲介する。ムリョノはジャワ神秘主義の源泉はこのことにあると言う。ナプスを静め神のもとへ帰るというかれの神秘観は，かれが語った以下の三行詩に表現されている。

Hai napsu dalam keadaan tenang	欲望よ静けき姿にあれ
Kembalilah kamu kepada Tuhanmu	おまえの神のもとに戻れ
Dalam keadaan suka dan mendapat rida oleh Tuhan	よろこんで神の引き受けに従え

ムリョノはまた，神を求める精神的旅の階梯について語る。第一はサレンガット *sarengat*，すなわち神への義務をはたす外面の行為である。第二は神に近づく道程タレカット *tarekat* である。第三はタレカットをつうじて生起する現実，究極的な真理であって，ハケカット *hakekat* とよばれる。第四はマリファット *marifat*，すなわち神の実在についての確信に真にたどりつくことである。人はサレンガットから出発するが，口で語り表面で行為するだけではなく，神の命令に真に心から駆り立てられてタレカットをおこなう。タレカットはハケカットを求めるためのものであり，ハケカットに達した状態がマリファットである。

3. イスラームとクバティナン

西アジア世界のイスラーム神秘主義についての往時の権威であるニコルソンによれば，スーフィーの導師たちの禁欲主義と道徳的修練の体系は，人間のうちに低次で貪欲な魂ナフス *nafs* があるという事実に立脚している [ニコルソン　1980: 39]。このナフスのジャワ語化した形がナプスである。またハケカット，マリファットへと至る神との合一の道という観念もスーフィーのものである [ニコルソン　1980: 28]。ムリョノはスーフィーとかタサウフ *tasawwuf*（イスラーム神秘主義）といったイスラームの普遍的な言葉を用いず，これらをジャワ神秘主義 *mistik Jawa* というが，そこにはイスラームの観念が非常にはっきりと現われている。

ムリョノはムハマディアの会員である。ムハマディアは，イスラーム正統派の信徒組織として，ナフダトル・ウラマ Nahdatul Ulama とならぶ大きなもので，とくに近代的傾向の改革派として知られている。したがって，一般には呪的・神秘的なクバ

ティナンとは対立的なものと考えられている。だがムリョノは神秘主義のジャワ的伝統と彼が考えるものについて，深い知識と関心をしめす。ムハマディアのメンバーでありながら神秘主義に傾倒し，ジャワ的な神秘主義の秘儀とみなされるクバティナンとイスラーム神秘主義とのあいだに区別や対立を設けないムリョノは，興味深い人物である。

ジャワのイスラームについては，イスラーム正統派とジャワ主義的混淆派との対立という図式がよく用いられる。ギアツによってあまりに有名になったサントリ *santri* 対アバガン *abangan* の二項対立図式もその一つである。こうした図式は現状を把握するには便利なものであるが，あまりにそれに頼りすぎると，現実は整然と二極に分かれてはいず，両者の中間にさまざまな変異と広がりをもって展開しているという事実が忘れられがちになる。ムリョノの姿はこのことを思い出させてくれる。

第1節にあげたムハマディア系の著名な指導者ラシディやハムカは，イスラーム正統の立場からクバティナンをはっきり批判する。だがこのイスラーム正統派とクバティナンという対立は，われわれがかれらの文章から想像するほど明確なものではない。トリスノはソロの町の教員養成大学で社会学を学ぶ学生で，わたしの調査の助手を勤めてくれた。かれは熱心なイスラームであり，わたしと村で起居を共にしていた時も，一日5回の礼拝をけっして欠かさなかった。かれはまたクバティナンにも熱心で自分の住居の近くにいるクバティナンの師キ・シロットのもとに通っている。トリスノに言わせるとこの師はほんとうのイスラームであり，人がかれの所を訪れ握手すると生計に恵まれるのだという。「イスラームの教えでは神の前にすべての人間は同等のはずであり，ある人間が他の人の運勢を変えるような特別の力を持ちはしないのでは」というわたしの疑問にたいし，かれはしばらく考えてからこう答えた。「神の預言者はムハンマッドで最後だが，その後も現世の人間に神の天啓 *wahyu* が下ることもある。ジャワにイスラームを伝えた使徒たち *wali* がその例である。イスラームは未来の予言はしてはならない。だから師のキ・シロットは人の運勢についての予言はしない。ただ握手をするだけで人の運勢が良くなる。これがジャワ的な呪者 *dukun* とちがう点である。」

トリスノにとってのクバティナンとは，特別の霊的力を持った人間が人を助けたり不思議な方法で恵みを与えるということであるらしい。かれにとっては，イスラームはイスラーム，クバティナンはクバティナンであって，イスラームのクバティナンもあれば，そうでないクバティナンもある。わたしが村に滞在しているあいだにも，ヒンドゥー教徒のクバティナンの師，中国人のクバティナンの師などが，村に自分の弟

子を訪ねて来るのに出会ったことがある。いったいに人はそれぞれのクバティナンの師の個人的資質・能力を問題にするが，かれの公式宗教帰属が何であるかには，さほど関心をしめさない。人が一様に強調するのは，金のためにいろいろな技を行なう呪者 *dukun* とクバティナンの師 *guru, kyai* とは違うということ，またブラック・マジック *ilmu hitam* はけっして許されないということである。

4. 精神の集中と霊感の追求

ムリョノは何といっても知識人であり，神秘主義を知識として把握しているところがある。かれは瞑想や思索を好むが，それによってとくに何か強く求めているものがあるようには見えない。一方，他の多くの村人はクバティナンをより具象的・感覚的なイメージで理解している。それは目に見える行為としての禁欲行であり，またそれを通じた神秘的力への接近である。こうしたクバティナン観をわたしに語ってくれたのはスダルトだった。

隣村に住むスダルトはクバティナンについて語るのが好きで，深夜遅くまで話しつづける。かれは，まだ30代前半の見るからに若々しい男だが，高校を終えた後，さらに農業専門学校に学び，現在は農業を営むかたわら，数年前から村役場の助役にあたる書記 *carik* の地位にもついている。現在の地位，学歴，富のいずれから見ても，村ではトップのエリートといって良いだろう。かれはムリョノと同様，農村部では数少ない高い学歴を持つ男だが，その関心はもっぱら農学などの現代的・技術的な領域に向けられ，ジャワの古い文献を繙いたりする趣味はない。また，村でも一二を争う金持ちであるムリョノが現在の生活に満足して悠々自適の生活を送っているように見えるのにたいし，まだ若いスダルトには将来に向けての夢や野心があらわである。とりわけ政治の面では，ムリョノに公的役職への野心や関心が乏しいのにたいし，村の助役で，政府与党ゴルカル Golkar のメンバーでもあるスダルトは，現在の地位のまま一生を終えるつもりはなく，実績を積み影響力を広げるべく，つねに努力を重ねている。

ジャワでは，このスダルトのように政治的・社会的な地位を求める人々のあいだに，しばしばクバティナンへの強い関心が見られる。神秘主義というと，現世的関心を捨てた隠遁者の純粋に形而上的な思索や，超人的禁欲行という面が強調されやすい。だがいかなる神秘主義も，真の実在や真理と観念されたものへの道である以上，そこで獲得された，より真実である状態は，経験的日常世界に作用を及ぼさぬはずがない。

神秘家が獲得する真の実在の力が，現世における人の運命を左右しうるものとされ，神秘主義と呪力信仰とのあいだの区別が薄れていくのは，神秘主義が大衆の中に影響力を広める時に必ずおきる現象である。スダルトのクバティナンへの関心も，そこで得られる力や知識が現世に及ぼす作用に向いている。かれはクバティナンについて，たとえばこう語る。

「クバティナンの要点は，あることについて考えを集中し (*konsentrasi*)，直感 (*intuisi*) を得て，生活の導きとすることだろう。たとえば自分の子が健康に育ち学業が進むようにと，願いと思考とをじっと集中する。思考の集中は，いつどこで行なっても良いのだが，ふつうは真夜中の12時ごろ，妨げのない静かな場所を求めて行なう。わたしの母もよく真夜中に庭先にじっと座り込んでいることがある。弟が高校の卒業試験をひかえていたころ，母はとくに熱心にそうしていたものだった。人はだれもがクバティナンの達人 *wong kebatinan* になれるわけではない。つまり未来を予知する能力は，特別の人だけが得られるものだ。だがだれでも，じっと考えを集中していると，ある直感がえられる。人は，よく若いころに，経験をもとめてクバティナンの実践にしたがう。わたしも昔，宮廷の貴族に連なる一人のクバティナンの師 *bapak* について，南の海岸のバロン Barong で水浴をし，師から頭に水を注がれたり，パチタン Pacitan の鐘乳洞で黙坐瞑想 *semadi* の行に従ったりした。その時はとくに何ごとも得られるわけではないのに，50歳を過ぎたころになって，その時の経験が生きてくるのだ。」

スダルトが考えるクバティナン実践の基本は，思考を内面に集中し，なんらかの内面的な経験をえることにある。得られる内面的な経験とは，イルハム *ilham* すなわち直感的に突然得られるなにかの観念やイメージ，ワンシット *wangsit* すなわち神のささやきとして送られる助言，あるいはまたワヒュー *wahyu* すなわち日常と隔絶した異常な強い力などである。人は，現世上の祈願実現の助けとなるようにと直感や霊的助言を求めたり，より一般的で不特定な内的経験，内面の力の強化を目指して，クバティナンを実践する。ワヒューと結びついたカリスマ的な内面の力をえたものは，未来のできごとを予知したり，人の依頼におうじて精神的助言をあたえる専門的なクバティナンの師となる。

こうしたスダルトのクバティナン観はムリョノのそれより，はるかに簡単で具体的であり，生活の導きとなる知を獲得することに重点がある。その知とは日常的・経験的な世界で得られるものとは異なった，より深い内面の知であり，瞑想やなんらかの禁欲的行為によって，経験的世界を超えた時に得られるものである。わたしが暮らしたD村とその周辺の人々のあいだには，スダルトのようなクバティナン観を共有して

いるものが多い。

内面的な知や力をえる手段は思考の集中であるが，それをおこなう時や場所にはさだまった型がある。まずそれは夜である。とりわけ毎木曜日の夜（ジャワ人の暦観念では一日は日没とともにはじまるので，ジャワ語では「金曜の夜」とよばれる），ジャワ・イスラム暦第1月の全期間，および第9月断食月の21日目以降の夜は，とくにこの行為にふさわしい時と考えられている。場所は一般に静かな妨げのないところであれば良いので，一人で自分の居室に籠って行なうこともあるが，戸外のほうがより一般的であり，墓地，村外れの川の中などが，しばしば選ばれる。

深夜，川中につかっておこなう行はクンクム *kungkum* とよばれる。スダルトは，若いころ40日間続けて，このクンクムをおこなったという。場所は川が二本合流して三つ又になったところが良い。夜中の12時すぎに川に入り，一時間，二時間とつかっていると，サーチライトのような光の交錯や轟音など，幻視・幻聴を経験する。またドミット *demit*，セタン *setan* などの口に牙の生えた悪霊，ムクソ *mukesa* というインド人の姿の魔物，骸骨など，さまざまなおそろしい姿の悪霊が現われ，精神の集中を妨げようとする。これに打ち勝って穏やかで静かな心を保つことにより，強い内面の力が得られるという。

村に何人かいる大工の一人クロモはクバティナンの専門家であり，多くの人が地域一円から，かれの助言を求めてやってくる。かれはまだ十代の若い頃からさまざまな禁欲行トポが好きだったそうだ。15年前のこと，近くの川の中で7カ月クンクムをつづけ霊感イルハムを得て，今のように有名になり人が集まるようになった。今でもかれは「金曜の夜」ごとに夜10時頃から耐えられる限り2―3時間ほど川につかる。

夜間に精神集中の行をおこなうのは，たんに静けさを求めてのことではない。眠りを減ずること，眠りを断つことに特別の意味がある。不眠の行はスシレッ *sesirik*，ティラカタン *tirakatan* などとよばれる。また食を減じ，食を断つことも，精神集中のための重要な手段である。たとえば，ジャワ暦で35日ごとに巡ってくる自分の誕生の日のたびに，日没から24時間食を断つ行をおこなう人がいる。またムティー *mutih* といって，塩を断ち米飯と白湯以外口にしない行，果物しか口にしない行，トウモロコシだけですごす行など，食を制限する実践には無数のバリエーションがある。こうした行為は総称してラコニ *lakoni* すなわちたんに「行ない」とよばれる。

ラコニという語は，食を減じ断つ行為のみならず，より広く，各種の感覚的欲望（ナプス）を断つことすべてをも意味する。感覚的欲望とそれにもとづく行為とは，外の領域，すなわちライル *lair* のことがらであり，内，すなわちバティンにおける知

や力を得るために，自分を外の行ないから引き離す手段が必要とされる。外の行ないを減じ断つことが，内における「行ない」なのである。

5. 人生の倫理

「内なる行ない」には，民俗的次元でニュアンスの異なる二つの方向づけがおこなわれる。第一は，民衆的・実践的な倫理哲学というべきもので，人生を穏やかで静かな心（アティ・シン・アエム・トントラム *ati sing ayem tentram*）をもって暮らすことである。

サミニは村に住むトラック運転手の妻で，住居の一隅で小さな雑貨屋を営む30代の女である。彼女はムリョノやスダルトとは違って学校は小学校しか出ていない。豊かでもなく社会的地位もない。だが彼女もまた，彼女が「親 *tiyang supuh*」とよぶ[3]，近くの村の老人をクバティナンの師として，人の生きる道についての知を学んでいる。

サミニがこの師に初めて出会ったのは8年前のことである。師にとってサミニは姪にあたり，最初は親類として知り合いになったのだが，やがてクバティナンの知を学ぶようになり，また困ったことや新しく直面したことについてなにかと相談する人生の師となった。弟子たちは小学校のように1級から13級にまで分けられ，程度を追って上の級に進んでいく。級ごとに課せられる条件がことなり，1級では白湯と米飯だけのムティーの行が課せられるにすぎないが，6級ともなると3日3晩の完全な断食が要求される。サミニは5級まで進んだが妊娠のため今休んでいるところで，夫のカルディは運転の仕事がきついので断食ができかね，なかなか級が進まないという。同じ村では，ほかに一組の夫婦がこの師についているだけで，他の村人は残念なことにサミニの師がいかに優れた知と力を持っているか知らない。彼女は師との経験をこう語る。

「人が人生でとおる道は，村からソロの町へいく時のようにさまざまだが，目的は一つ，静穏な心，経済的安定，健康で争いのないことだ。人は千人のうち九百九十九人までゴンソ *ngangsa* である。つまりそれは，満足の感情がないこと，支配するもの（シン・クウォソ *sing kuwasa*＝神）からあたえられたものを受け取らないことだ。その反対はヌリモ *nerima* つまり，神から与えられたもの，人生で身に振りかかってくるすべてを，穏やかな心で受けとることだ。人は経済状態が良くなければ穏やかな

3）クバティナンの専門家・師は一般的には「クバティナンの人 *wong kebatinan*」と言及される。だが人が自分の師や助言者を呼んだり言及する時には，「親 *wong tuwa/tiyang supuh*」または「キヤイ *kyai*」という言葉が使われることが多い。

人生は送れない。だが豊かであっても暮らしが穏やかとは限らない。学校は生計の手段，経済，地位向上のための知を教えてくれるが，師の教えは穏やかな心を教える。

自分の夫は前にジャカルタでバスの運転手をしたりスマランで乗合バンを運転していて，収入は多かったが，生活が派手で浪費に走り，家を省みないで遊んでばかりいた。家に金も入れないので，自分は4番目の子が生まれた2カ月後には，川で砂利を掘るきつい仕事もしたし，街角で男にさそわれて金をもらったこともある。住居はぼろぼろで椅子もなく，客がくるとござを出すしかなかった。だが師のもとに通うようになってから夫は家に落ち着き，今では経済状態も良くなった。家の入り口の戸も，竹を編んだだけのものから木製の戸板に替え，黄色のペンキも塗った。ビニール張りの応接セットや寝台も買ったし，前は病気ばかりしていた子どもたちもすっかり丈夫になった。家族が仲良く健康で良く働きさえすれば，生活はどうにもなるものだ。これもみな師の導きのおかげである。」

彼女にとって人間は，食物，衣類，住居，家具什器そして金などの物質をもとめ，肉体的感覚的欲望，嫉妬や愛憎に追われる存在である。そうした欲望（ナプス）を制御し，神から与えられたものを進んで受け入れて満足することを学び，それによって心の静穏にいたるという現世的人生訓が[4]，彼女にとっての「内なる知」である。したがってそこでは，食や寝を減ずる「行ない」が，知に達する技であるとともに，ヌリモという一般的観念・態度をしめす具象的シンボルとしても作用する。よりはっきりとイスラーム的なムリョノが神秘観の中心にすえていた欲望ナプスの統御の理論は，サミニの場合には，より通俗的な庶民的人生訓に形を変えている。だがナプスの概念が広義のジャワ神秘主義の中核にあるという事実は，ここでも変わりがない。

6. 力の獲得

内なる行ないラコニの，もう一つの方向づけとは，宇宙的な大いなる力に直接接触しようとする試みである。その力とは，抽象的・観念的なものではなく，具体的な表現形式をともなう。川中につかる行クンクムにかかわって現われたという，白い光，轟音などの幻視・幻聴，悪霊の脅威などは，こうした力の表象にほかならない。ラコニは自己の内なる力を強める手段である。だが，強い内の力をもたないものが，自己の程度に合わないほど強いラコニをすることは危険だともいわれる。ソロの町外れに

4) 彼女は師の教えはこの世 *urip kene* についてのもので，イスラームのようなあの世についての教えではないと理解している。

住み，市内の大学で英語学を学ぶラルソは，かれのクバティナンの師の指示にしたがって，夜9時より朝5時まで一晩に七回の水浴びを繰り返しつつ，じっと黙座して心を空虚にする行をおこなった。しかしかれは，そうしているうちに体が熱くなってきて耐えられず恐ろしくなり，行は完成しなかった。光や熱の表象は，宇宙的力を表わすため非常にしばしばもちいられる。人がラコニによって得る内なる力は，こうした宇宙的な力と同一のものであり，人は内においてそうした力との一体化をはたす。

こうした力をとりわけ強く内に帯びた人や物体はアンプー *ampuh* と形容される。今はもう故人となった一人の村人はアンプーな人物として名を知られ，かれをめぐってさまざまな伝説が伝えられている。かれは若い頃，村の共同墓地で40日間食を断って精神集中の行をおこない，未来を知る予言者にして超能力者となった。かれはまた二頭の牛に牽かせても動かない大きな石を軽々と動かし，未来を予知する力をもち，県知事 *bupati* や検事 *jaksa* などもその助言を乞いにやってきたという。村の中の一角に悪霊（ジン，セタン）の宮殿といわれる土地があり，そこに家を立てて住んでいた家族は一年半のうちに四人までが死んだ。夜になるとその家では四方からガタガタと音が鳴り，戸棚の前で女の姿が上下に飛び交い，家全体が揺れ動いた。しかし超能力者の老人は，そこで平気で夜を明かして何事もなかったという。

アンプーな力は，また短剣（クリス）や，指輪にはめこまれた宝石にしばしば籠っている。こうした短剣や宝石は，あらかじめ強い内面の力をもっている者に所有されれば，より大きな力を与えるが，そうでない者には，逆に災いをもたらすと信じられている。1948年のオランダ軍の第二次軍事行動でソロの町も占領され，共和国派が周囲の村々でゲリラ戦に入った頃，川の南で捕まったオランダのスパイが銃殺されることとなった。ところがかれに弾丸があたってもそのまま身体から滑り落ち，無傷のままである。知恵のあるものがその身体を調べると指輪にアンプーな力が籠っていたことがわかり，これを外してからあらためて銃殺したという。短剣，槍も強い力を持つものと考えられている。人々の信仰によれば，昔の王侯領時代の宮廷には神秘的な力を持つ刀鍛冶がおり，超自然の力を持つ鉄ブシ・アジ *besi aji* を腿の上で拳で叩き指でつまむだけで剣を鍛え上げた。こうしてできた武器は，所有者の内面の力との釣り合いを要求し，ふさわしくない所有者のもとでは，戸棚の中でひとりでに音を立てたり動き出して警告する。村の雑貨屋スナルの父は，もともとソロの宮廷でガムランの楽器を預かる小役人であった。この父が死んだ時，スナルの母はマルトと再婚し，亡夫の短剣を携えて村にやってきたのだが，それ以来マルトはずっと病が癒えず，短剣を川に捨てたところやっと元気になったという。

アンプーな力はおもに王と宮廷に由来するという観念は，かつてマタラム王国の宮廷をかかえていたソロ地方の住民のあいだに，いまだに根強いものがある。宮廷で王の御料馬車の塗装をしていた男が，作業に用いた余りの針金を持って帰ったところ病気になり，宮廷の倉庫に返したら快癒した。村の近くのトガル・ゴンドにあった王家所有のタバコ工場には，王専用の椅子が備えてあったが，日本軍の侵入後，ある村人が家に持ち去った。ところがそれからというもの家族に怪我人，病人がつぎつぎに出るので，男は椅子をソロ河に流し危険を避けた。また，1966年にソロの町が数十年ぶりの大洪水に襲われた時，水を逃れた住民が，川沿いの離宮に繋留された王乗用の舟に乗り込んだところ，舟はにわかに転覆して全員が溺れ死んだ。こうした伝説の類は，今でも盛んに人のあいだで語られている。

7. 墓地に夜をすごす

人が内なる力をもとめてする禁欲的な行ないは，前節に見たように，時・場所・形式ともさまざまであり，またその目的も，より抽象的で体系化された知と力の獲得をめざすものから，個別的・具体的な生活上の助言を求めるものまで，さまざまである。そうした中で日常とくに広くおこなわれるものに，木曜の夜（前述の「金曜の夜」）墓地で夜をすごす行為がある。墓地が選ばれる背景には，人の死後，肉体を離れた霊 *arwah* が墓に留っているという信仰がある[5)]。人が訪れるのは，死んだ肉親の墓，あるいは生前特別の力を持っていたと伝えられる神話化された死者の墓である。村では多くの人が，木曜の夕方ごとに，祖父母，両親，先立った配偶者などの墓を訪れ，携えた香と花びらを供えて墓前で礼拝する。特定の重大で困難な出来事にぶつかった時には，墓のかたわらに坐したり，横になって夜を明かすこともある。

カルトは50代の農民で，かつては地域一帯に強い勢力を誇っていたインドネシア共産党の支持者であった。1965年に，共産党と軍やイスラム勢力との対立が頂点に達し，多くの党員や同調者が捕えられたり殺されたりした。この時カルトは，自分もいつ殺されるかわからぬ危機の中で，食を断ったまま親の墓所で毎夜をすごしたという。そうして何日かしている内に，夢・幻の中に父の姿が現われ，「おまえのこれまでの考えは間違っているから，考えを改めるように」と告げた。この父の霊の助言のおかげで，今日まで無事に暮らしを続けることができたと，カルトは考えている。

5) 断食月中は人は墓地を訪れないが，これはこの期間，死者霊が墓地を離れて天に行ってしまうからだと説明される。

40代の大工パイディが，娘の病の治癒を願って訪れた墓所は，肉親のものではなく，過去の伝説中の人物の墓である。かれの7歳の末娘は，3年前に裏庭で遊んでいて井戸に落ち，その時はけがもなかった。ところがその後，全身を痙攣させ叫びだす発作に，しばしば襲われるようになった。パイディは娘を町の医者に連れていき，レントゲン検査も受けたが，病はいっこうに治らない。それで今度は知り合いの呪医 *dukun* を訪ね，二つの指示をうけた。一つは，発作の時に与える生薬の処方であり，もう一つは，村の墓地にあるドノクルティ爺の墓で夜を過ごして，その霊の助言を求めることであった。ドノクルティは，史実の上の大事件である1825年のディポヌゴロ反乱（ジャワ戦争）とかかわる村の伝説中の人物で，人々の信仰をあつめている[6]。パイディ自身はドノクルティの墓で何があったかについて黙して語らないが，人の噂によれば，墓のかたわらにうずくまっているパイディの前に，ジャワの正装に身をつつんだドノクルティが現われたそうだ。そして語るには，数年前の夕暮れ時，パイディが自転車に乗って町から帰ってきた時，車輪がはねた小石が橋の下にいた雑霊 *jin* の頭にあたった。雑霊はこれを怒って娘に災いを与えているのだから，これこれの品物をさし上げて，機嫌を直すように願えとのことだった。

パイディも人々も語らないので，その結果がどうなったかわたしは知らない。木曜の晩，墓地をのぞくと，ときおりドノクルティの墓前に坐している人の姿が見える。またその翌朝に墓地へ行くと，墓のかたわらには，花びら，香，食物などの供物の残骸が散乱している。人々はさまざまな願いごとをもち，秘やかにドノクルティの墓に詣でて夜を過ごすのである。

8. 意味を告げるしるし

クバティナンの目的を人はさまざまに表現する。感覚的欲望を去って神のもとに帰る，穏やかな心で暮らす，宇宙的な大きな力に触れ合う，直感により神の言葉を聞くなどと表現はさまざまであるが，これを観察者の言葉で一般化するなら，経験的な外（ライル）の世界を超えて内（バティン）の世界に入りこむこと，つまり，より価値の高い異次元の現実に達することにクバティナンの目的があるといえよう。クバティナンを信ずる者のあいだで特に強調されるのは，知ること，理解することである。外面では隠されている世界の真の意味を知り理解することである。世界は偶然のままに

6) 伝説によれば，かれはディポヌゴロと同じくジョグジャカルタ・スルタン宮廷の貴族の一人で，反乱に加わったがオランダに敗れ，今日の村の地まで逃げのびて死んだ。人々はその墓をつくり，ドノクルティは神格化され，人々の信仰を集めることになった。

でたらめに動くものではない。さまざまなものごとは一貫した秩序によって相互に結びつき定められたように動いているのであり，ある出来ごとには必ずそれの原因があり，予兆たるしるしがある。こうしたしるしを読みとることが，現象の真の意味を知ることであり，未来を知ることである。こうした信念のもとに，クバティナンの信奉者は真に知ること，理解することを強調する。

あらかじめ決定されている現実の真の意味は，人の目の前にあらわになったものではない。それを知るためには，人の感覚が捉えるさまざまなしるしを手がかりとして，その意味を解読しなければならない。断食，瞑想その他の身体上のテクニックはそのための手段の一つである。人が墓の前で夜を明かす目的は，墓に宿る肉親や過去の英雄・聖者の霊への祈願には止らない。そうした諸霊が暗示するしるしに依って，経験的世界の真の意味を知ることに究極的な目標がある。ジャワの古典学に親しむ者が古文献を繙く時も，文字というしるしの背後に隠された意味を探る技法が不可欠である。またこうした，それぞれに特定の方法の実践や習熟を必要とする意味の探求の背後には，以下に述べるような，出来事の前兆への非常に強い関心と鋭い感受性が存在する。それは，日本語にいう「虫の知らせ」のごとき意味伝達と知覚の形式への，強い信念である。

ジョグジャカルタの国営ラジオ放送局では，毎晩「家族ニュース Berita Keluarga」という死亡通知の番組を放送している。ジャワ人にとって家族，親類，知人の葬儀への参加は非常に重要な義務である。遠く離れて住んでいる家族には，一刻も早く死亡を知らせ，すぐ葬儀の場に駆けつけて来られるようにさまざまな努力がはらわれる。電話がまだ普及せず，電報，郵便も必ずしもあてにならないジャワの現状では，安い料金で利用できるこのラジオ番組は人気が高い。人々は可能なら電報を打ち，あまり遠くない所なら使いを立て，さらにラジオ放送を依頼するなどして，何かそのうち一つくらいは，目指す肉親のもとに届くことを期待する。この死亡通知番組に人は熱心に耳を傾け，さまざまな言い伝えが人のあいだに広まっている。たとえば，ふだんはジョグジャカルタの国営ラジオ放送など聞かない人が，なんとなく気にかかってダイアルを合わせると，ちょうど肉親の死の知らせにぶつかり，あわてて故郷に旅だって葬儀に間に合った，といったものである。

ソロの市街の南西隅に豊かなジャワ更紗（バティック）商人の邸宅がならぶラウィヤン地区がある。この地の商人の一人で，老齢のためもう半ば引退しているブロトは，以前仕事でジャカルタにいた時，何か妙な予感がして急いでソロに帰ったそうだ。家に着くと妻はもう危篤状態で，そのわずか一時間後に息を引きとった。かれが妻に最

後の別れをすることができたのは，この不思議な予感のせいであるという。

肉親の死の予感といった例は，もちろんジャワとかぎらず世界の各地に見られるもので，それ自体はクバティナンであるとは言えない。だが，人の死とかぎらず，世のあらゆる出来事や運勢・吉凶には必ず何かの前兆があるもので，逆に言うとさまざまな何気ない出来ごとには別の何事かを語る隠された意味があるものだという多くのジャワ人の信念は，クバティナンの重要な基盤となっている。ブロトもまた，世界の出来事はすべてあらかじめ定まっており，しかるべき知と術を身につけるなら，それを知ることができると信じている。かれは自分の経験を以下のように語る。

「人の一生というものは，もうすべて定まっているもので，ある種の人間にはそれがちょうど絵のように鮮やかに見えるものだ。自分が心臓を患うより一年も前のことだったが，あるクバティナンの師にそのことを予告され，大病になるがやがて回復すると言われた。クバティナンの達人には先のことが見えるのだ。この種の人の予言は直接はっきりとは語られないので，その真の意味を知る必要がある。明日は外出を止めて一日家にいなさいと言われたとする。これを無視して外出すると思わぬ事故にあう。だが師は事故にあうと直接に語りはしない。妻が死んだ時，自分は死者の罪の許しを願って，ラウィヤンにある昔の聖者キ・アグン・ニスの墓に，毎夜１時に家を出て四十夜のあいだ通いつづけた。すると最後の40日目の夜になって，目の前に映画のような画像が現われ，食物を盛った皿が三枚，木に囲まれた墓，一人の女，さらにもう一人裸の女が見えた。これが何の意味か自分にはついにわからなかった。クバティナンに通じた者には，その意味がわかるのだろうが。自分は山中，海岸，洞窟に籠るような修行はしたことがない。だから特に先を見る力は持っていない普通の人間にすぎない。だがわたしも自分の家では，しばしば瞑想の行を繰り返してきた。そうしている内に少しは力がついたのだろう。人と話していて，自分では何とも知りはしないのに，相手が見事に言い当てられたと驚いたり，後になって，あの時のおまえの言葉どおりになったと言って来ることが，このごろ良くある。これはわたしがしゃべっているのではない。神が自分の口を借りて語っているのだ。」

ものごとは神の手や宇宙的な力によってもうすでに定まっているのだという観念は，受動的・消極的な態度と受け取られるかもしれない。先にサミニの例でふれた「神に与えられたものを満足して受け取る」というヌリモの人生観も，個人的な努力を放棄した静寂主義のように解されるかもしれない。だが，わたしが出会ったクバティナンを信ずるジャワ人は，皆さまざまな願いや欲望をいだき，必死に行動している普通の人たちである。ただかれらは無制限の欲望というものの危険を知っている。また，願

いや欲望が激しいからこそ，それを実現するために，自分個人の努力や実践を超えた何かの手がかりをつかもうと必死になっているのである。クバティナンの知識はかれらに行動のための道筋を与え，また個人の実践や経験的知にとっては不可知で偶然でしかない領域に，一貫した世界像を用意してくれるのである。

おわりに

ジャワのクバティナンは，以上に見たように非常に幅が広く変化に富む観念と行為の体系である。その基盤には，感覚的欲望ナプスの統御によって神のもとに帰り，究極的な真理たる神の実在へたどりつくというイスラーム神秘主義の一つの基本的態度が横たわっている。だがそこには，神秘主義の文化史を論ずるものがいつも出会うように，一個の文明伝統だけに帰すことのむずかしいさまざまな要素が融合し熟成して，ジャワの神秘主義としか名付けえない一体系が生み出されている。クバティナンは，特定の教派や宗教運動と見るにはあまりに広いものであって，世界を解く形而上学，日常世界を深部で動かす秩序を知るための知と技，素朴な人生の倫理訓，現世上の祈願実現のための呪的力の操作術など，個人ごとの立場によってさまざまに異なる姿を現わす。ジャワ人の世界観といった言い方は，六千万人のジャワ人に一様に共有される均質な世界観の体系を想定しえない以上，つねに危うい表現である。だがすくなくともクバティナンはジャワ人が共通に理解しうる一つの世界観的枠組みを用意しており，これを信ずるにせよ，あるいは懐疑的だったり批判的であるにせよ，共通の準拠点を与えるものである。そうした意味で，クバティナンはジャワ文化の総体と重なるほどの広がりを持つ現象だと言うことができるだろう。

本稿では詳しく触れなかったが，村の若い助役スダルトの例にも見られたように，政治に関わり野心を持つ者のあいだでしばしばクバティナンが盛んであるという事実は，ジャワ，インドネシアの政治文化を考える上で重要である。クバティナンは世界に秩序を与える力のハイアラーキーについての理論でもあり，個々の人間の力と位階の差を説明することにより，政治権力の正統性を裏付ける機能をも持つと考えられる。この点は今後さらに広い民族誌的・歴史的脈絡で検討すべき課題である。またクバティナンが，ジャワ人の世界理解に共通の枠組みを与えうるのは，世界の出来事の真の意味をさまざまなしるしから読み解いていくという知覚と意味解釈の神秘主義的形式に，ジャワ人の多くが関心と感受性を共有しているからにほかならない。この点は，日本をも含めた広い地域の民俗的宗教における，しるし，きざし，予兆といった現象

の研究に，一つの豊かな比較資料を提供するものであろう。

謝　　辞

本稿の完成までには，いつものように，日本，インドネシア両国のさまざまな方々のお世話になった。この論考を生むことになったジャワでの調査に機会を与えてくださった国立民族学博物館特別研究代表者の佐々木高明先生，筆者を招いていろいろと滞在中の便宜を図ってくださったジョグジャカルタのインドネシア美術高等専門学校工芸科のスハジ先生 Drs. Soehadji には，特にここに記して謝意を表したい。

文　　献

HAMKA
1974 *Perkembangan Kebatinan di Indonesia.* Jakarta: Bulan Bintang.
HARUN Hadiwijono
1967 *Man in the Present Javanese Mysticism.* Baarn: Bosch en Keuning.
DE JONG, S
1976 *Salah Satu Sikap Hidup Orang Jawa.* Yogyakarta: Yayasan Kanisius.
MULDER, Niels
1980 *Mysticism and Everyday Life in Contemporary Java.* Singapore University Press.
ニコルソン，R. A.
1980 『イスラムの神秘主義』中村廣治郎訳，東京新聞出版局。
RAHMAT Subagya
1976 *Kepercayaan Kebatinan Kerohanian Kejiwaan dan Agama.* Yogyakarta: Yayasan Kanisius.
RASJIDI, H. M.
n.d. *Islam dan Kebatinan.* Jakarta: Yayasan Islam Studi Club Indonesia.
WARSITO, S., H. M. RASJIDI and H. Hasbullah BAKRY
1973 *Disekitar Kebatinan.* Jakarta: Bulan Bintang.